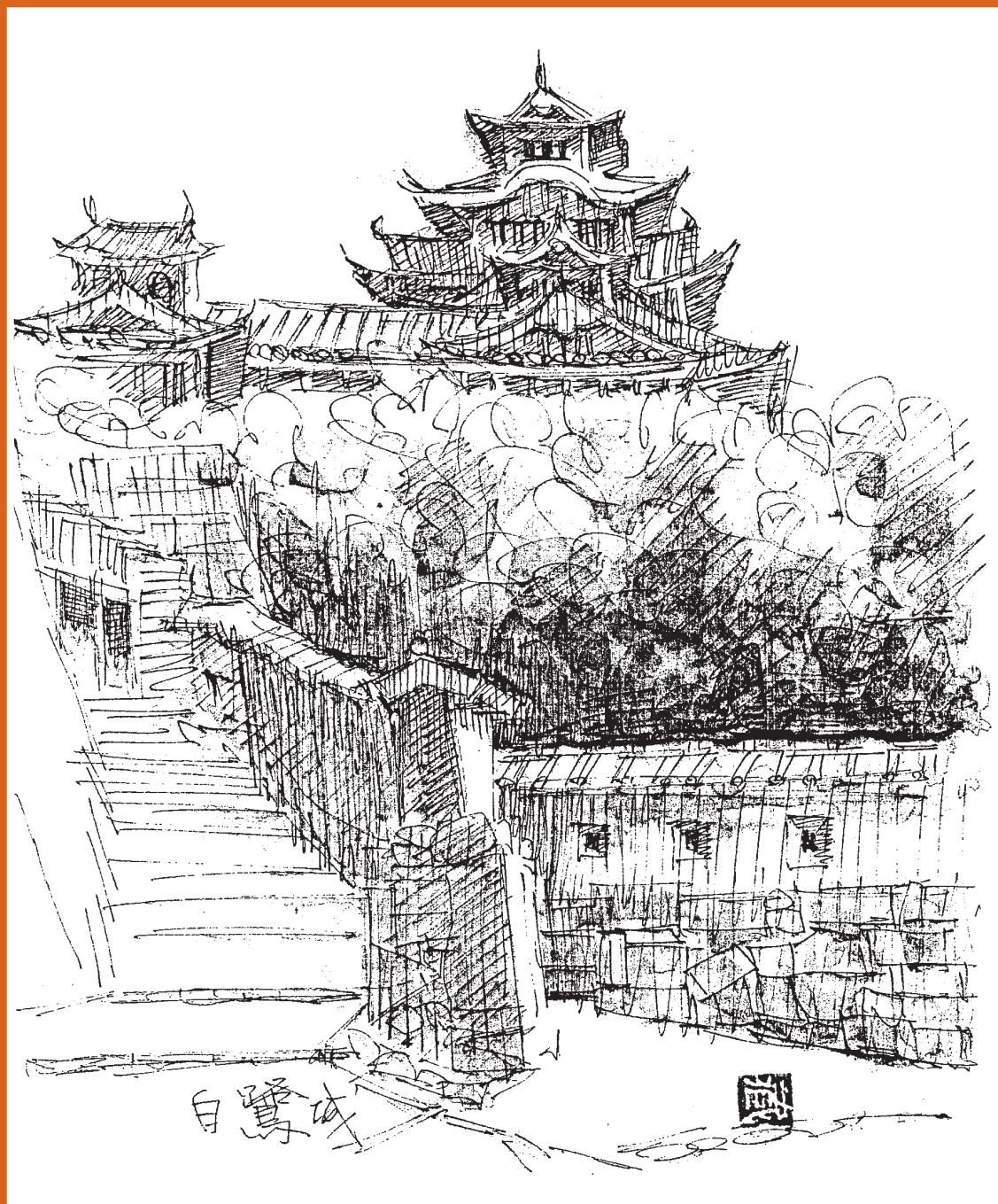


やまさき文化

’09－3 * No.28



穴粟市山崎文化協会



世の中よなか 安穏なれ あんのん

中
なか
安穩なれ
あんのん

藤井慧乘

本年の冬は、過年に比べ暖冬であった。私が小学生の頃徒步の一里の道は寒さに手を摺り合わせながらの耐寒の一時間、宍粟橋下の水溜まりは勿論、道路上の水溜まりの氷を滑って遊びながらの通学であった。最近はそんな寒さにも出会わない。気象上での暖かい冬に反し現今の中世相、政治、経済、環境などをとっても混沌と迷い、不安が渦巻いている。

中世の金剛院、承和の時、伊豆守の新義聖は人に酒呑て、世相を嘆かれた。「世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」と願われた。

新鸞は「晩年の様々な書簡の中で、佛（如来）の智慧と慈悲に遇うと一世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」との如来の願いに育てられ、安穏の世界の実現を目指さずにはおられない様になると告白しておられる。

ただし、それは、仏道修行者の既に悟りを開いた人の上位に立っての言葉ではなく、佛の慈悲にあつた者が、我自身こそ、安穩ならざる人間であつたと気づかれた、「眞実の心の叫び」の言葉である。

即ち佛(如來)が、世の中安穩なれと願つておられる、それを、たんに如來の教えである故に、道徳律として客観的な教えを遵守すれば足るという理解ではなく、我自身の反安穩の發見、気づきの苦しみがあつたからではなかろうか。

現代人は、世の中は安穏でないと人ごとの様に評価するけれど、世の中ではなく、自己自身のなかに存する安穏でない事に、気がついていない。世の中安穏なれと願うとき、その第一前提となる、私自身のこころの在り方に考

えをすすめるべきであろう。
安穏を推進するのは、その主体、政治でも、行政でもない、私自身が根本
なのである。

まさに現代はどうなるか、不安動搖の世である。
「安穏」やすらかに、おだやかに、「文化」はそのひとつとして、存在する。

◇ 目次 ◇

藤井の別れ

地域貢献 ふるさとに感謝

俳 短
句 歌

歳のとり方を学ぶ

草木に親しむ

歴史の褶痕を探る
道想一筆

一期一会

金匱要略

卷之三

感謝状に感謝

平成会二十周年を迎
八三二取未

出会い

田中合田のこのごろ

心の張り合い

事務局だより

編集後記

表紙題字

表紙題字

『桜井の別れ』

浅田耕三

隠岐に流されていた後醍醐天皇が楠木正成や赤松円心（則村）、新田義貞、名和長年ら、戦前の歴史教育を受けたものにはいずれも懐かしい名将たちの活躍で京に還御されたのは元弘三年（一二三三）六月のこと。

北条高時が自害し、鎌倉幕府が滅び、かくて後醍醐帝による新政が始まる。王政復古であり世に呼称されている「建武中興」である。

近頃覚えたことはすぐに忘れるが、子供の頃習ったことはなかなか忘れない。歌もそうだ。歌といつても子供の時覚えたのは殆んど軍歌で、軍歌以外に学校で習った記憶があるのは「春の小川」だけである。そんなはずはないと思うのだが、この歌以外には思い出せない。

十歳齢上の叔母がいてその叔母がどういうわけか「桜井の別れ」（正式の名前ではないかも知れない）という歌を一生懸命教えてくれた。叔母自身がよほど好きだったのだろうが、五つか六つの時にくり返しうたわされたおかげでいまだにこの歌の文句はよくおぼえている。

「桜井の別れ」といっても、今の若い人には殆んど通じないであろう。鎌倉末期、南北朝時代の南朝の忠臣楠木正成が兵庫の決戦に赴く途中、桜井の宿駅で、わが子の正行と別れを惜しむ歌である。

青葉繁れる桜井の
里のわたりの夕まぐれ
木の下蔭に駒止めて
世の行く末をつくづくと
しのぶ鎧の袖の上に
散るは涙かはた露か

こんな歌詞で始まる長編抒情歌であるが、今でもこれを口ずさむと、生家の裏の小高い丘の上にあった大師堂の縁に座って眼下に広がる新緑の風景を眺めてうたった記憶がよみがえる。一人でうたったのか、この歌の好きな叔母さん先生とうたったのか、そのへんのことは曖昧なのだが――。この「桜井の別れ」は『太平記』の中でも名場面で、これまで何度も読み返してきたがその歴史的背景を史料によって少し辿ってみようと思う。

しかし、この天皇新政はたった二年三ヶ月で行き詰まり崩壊した。王政復古のために働いた武士たちに対する論功行賞が至極不公平で、土地所有を訴え出る雑訴決断所という名の役所の裁定が武士は疎んじられ、公卿や役人、女官、僧侶、遊芸人たちに有利な判定をするなどでたらめで、武士の政治不信、不公平感が渦巻いたのである。一所懸命の語の示す通りこの時代の武士は文字通り土地に命を懸けていたのに、要するにわかに鎌倉幕府にかわって政権をとった天皇の新政府が政治に不慣れだったのだ。朝令暮改が毎日のようにくり返された。

その新政に見切りをつけ、足利尊氏が帝に叛いて幕府を開くと多くの武士がこれに靡いた。尊氏はその軍勢を率いて鎌倉から京に攻めのぼる。「この合戦に忠義を尽くし、功を挙げた者には十分な恩賞をとらそう」と後醍醐帝は綸旨を発せられた。そうしたらすぐに民衆の中から落首がうまれた。「かくばかり、たらさせたまふ綸言の汗のごとくになど流るらん」綸言は汗の如し、という。天子のお言葉はひとたび仰せ出されると、汗のよう、体内にもどる事はなく必ず施行されるきまりであった。ところが今の帝のお言葉は、汗のようすぐにどこかへ流れ消え去ってしまうという皮肉である。

新田義貞が尊氏追討の命をうけ、箱根で尊氏軍を迎えて討ったが惨敗して京に逃げかえった。初戦に勝って気勢を上げた尊氏の大軍が京に攻めこんでくると聞いて帝はすぐさま比叡山の東坂本へ避難された。破竹の進撃で京へ入った尊氏軍だったが畿内には楠木、新田のほか名和や千種忠顯ら官軍がいてスクラムを組んでこれに対抗し、そこへ北畠顕家が奥羽の大軍を率いて京に入ったのでたちまち形勢は逆転し、尊氏は敗れて九州へ奔った。

そのあと官軍の戦略が失敗だったのは、九州へ逃げた尊氏軍を急追しなかつ

たのと、北畠の大軍を奥州へ帰してしまったことだといわれる。

京から逃げた尊氏は九州でたちまち勢いをもり返し、僅か三ヵ月日には雲霞

の如き大軍となつて東上の機会を窺う。

朝廷は再び義貞に尊氏追討を命じたが、義貞はなかなか腰を上げなかつた。

というのは後醍醐帝の愛妾の一人で、当時都隨一の美女の誉高かつた勾当内侍（女官）という女性を武功の褒美として帝から頂き、その美女との別れを惜しくて時を空費したのだと『太平記』は記す。

延元元年（一一三六）三月末、義貞はやつと重い腰をあげて京から播磨まで西征したが、播磨には赤松円心が白旗城に拠つて義貞の進撃を阻んだ。

円心は三男の則祐がかねて後醍醐帝の皇子護良親王に随従し勤勤を励んでいた関係で、いち早く勤皇方として鎌倉幕府軍とたたかい、建武中興実現には楠木正成に次ぐ武功をあらわし、それを賞されて播磨守護職に任せられた。しかし程なくその職を召上げられ、わずか佐用庄一ヶ庄の地頭に格下げされた。

円心が僧体であるという理由にならぬ理由によつて守護職を免ぜられたのだが、例によつて後醍醐王政の感情的、恣意的な措置であつた。

裏に帝と護良親王御父子の確執があり、それがほんとうの理由であつた。

赤松勢は千早、赤坂城で鎌倉幕府の六波羅勢をさんざん翻弄した楠木正成の河内勢と同じく土豪であり、『峯相記』にいう「悪党」で、関東平野を馬で疾駆して一騎打ちを競う坂東武士とはまるで違つたゲリラ戦法、足軽戦法の集団であつた。

義貞は三月末から五月なかばまで白旗城を囲み、攻めたが埒があかず、円心の奇策にふり回されてばかりで、空しく時をすごした。

その一例。城を囲んでいる義貞に櫓の上から円心が大声でいう。「自分は折角任じられていた播磨守を召し上げられたのがまことに残念。新田殿のお執り成しで再び播磨守をたまわるべく帝の宣旨が預けるなら、喜んでお味方し、貴殿の西征の道を開きましょう」

人の好い義貞はこれを真に受けて即時城攻めを中止し、京へ急使を立て、帝の宣下を頂いて播磨へとつて返し、城中の円心にかくと伝えた。そしたら円心は「帝の宣旨など何の役に立とう。わしはすでに將軍足利尊氏殿より播磨国守

に任じられているのだ」とこたえ嗤いとばしたといふ。

最初、建武の新政府は、円心から播磨国をとり上げた時、それを義貞にそつくり与えていたのである。したがつて円心にしてみれば義貞に対しても格別の恨みがあつたのだ。義貞は、円心の心の襞がよみとれなかつたのであろう。

そうこうしている間に、播磨から下関に至る尊氏軍東征の道は整つた。『梅松論』という書物によると、尊氏軍の太宰府進発は四月三日、ゆっくり進んで五月五日備後の鞆の津に着いて軍勢を海陸二つに分け、尊氏は海路、弟の直義は陸路を進んだ。その兵數海路七千五百艘、陸路の直義軍五十万などと『太平記』はかく。が例によつてこの数は信用できない。『太平記』はすぐれた戦記文学でおもしろいが、数字にはとくに誇張が多い。ただしこの場面の兵数は『梅松論』の方も信じがたい誇張がある。

しかし九州全土の兵を率いての上洛だから足利勢は相当の大軍だったのだろう。

義貞のしらせで朝廷は仰天し大騒ぎとなつた。ただちに河内から正成を召し寄せ、「急ぎ兵庫へ下つて義貞と共に尊氏軍を迎えて」と命じられた。正成は奉上した。

「尊氏の大軍を迎えて討つわら官軍はあまりに少数で、たたかえばおそらく敗北するでしよう。主上には前年のように、一たん山門（比叡山）へご臨幸あつて、そののち尊氏軍を京へ入れ、新田殿は山門、私は淀川の閑門を押えて敵の糧道を断ち、弱つた所を両方から挟み討ちにすれば勝機も掴めましょう。」

並み居る公卿達はこの提言になるほどと頷いた。いくさにおいて鍋底のようないきの町を守つて成功した例は古来一度としてなかつたのである。

ところがいつの會議にもしゃしゃり出る参議の坊門清忠なる男がしたり顔でとうとうと述べたてた。



「一年のうち二度も主上に山門へ行幸願うのはあまりに畏れ多い。なに、この前、尊氏が鎌倉から攻めのぼってきた時も官軍は勝利をおさめた。それは官軍が強かったのではない。すべては天皇の御陵威による勝利であった。こんども同じ結果となるであろう。安心して兵庫におもむくがよい。」

天皇の御陵威。戦前・戦中を経験してきた者には実に懐かしい言葉である。第二次大戦中、戦争指導者がくり返し口にしていた用語だ。

この発想は中国東北部の蛮族女真（きん）に武力で追い詰められ、長江の南まで逃げた南宋の皇帝に仕える人民、すなわち漢民族に国家存亡の危機を訴え、民族の結束と忠誠心を鼓舞するために朱熹（朱子）が中国の歴史家司馬光の著した『資治通鑑』の中から要点を抜萃して編述した『通鑑綱目』の理論を自分たちに都合よく日本の南朝にあてはめて解釈した発想で、後醍醐帝は絶対の善であり、これに叛く尊氏軍は絶対の悪、善なる官軍が悪なる尊氏軍に敗れるはずがないという観念論である。坊門清忠の弁舌に天皇以下公卿たちはみな賛同し、かくて正成の案は却下された。「もはやこれまで」と正成はこの時死ぬ決意をした、と『梅松論』は記す。

建武三年（北朝廷元元年）五月十六日、たった五百（七百とも）の兵をひきいて正成は湊川に向かつた。

その途中、山崎街道の桜井の駅で十一歳の子の正行に訓戒して別れを告げるのである。「今度の合戦は天下の安否わかるる時と思ふ間、今生にて汝が顔を見ること、これを限りと思ふなり。正成すでに討死すと聞きなば、天下は必ず將軍（尊氏）の代になりぬと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助からんために多年の忠烈を失ひて降人に出づることあるべからず」

『太平記』は、討死を決して子にせつせつと説く正成の言葉をこのように記す。

しかし、この「桜井の別れ」は『太平記』の作者の創作で史実ではない、とする説が近年出ている。それは、正行はこの年の十二月に吉野の行在所の内裏経宮を委任され、左衛門尉に任官しているという説。わずか十一の子が重職につき、官位を授かる筈はない、だから桜井の別れがほんとにあったとすれば、その時点では正行は少なくとも十七歳の若者になっていた筈で、そうとすれば

『太平記』中の正成の訓戒はあまりに幼い者に対する言葉づかいであるとする。

これが創作説の根拠だ。しかも『太平記』以外の、『梅松論』など、他の書物には「桜井の別れ」は一切出ていない。というのも創作説を後押しする。他にも創作説が根拠とする資料があつて、桜井の別れの四年後の延元五年、建水分神社奉納の献額に、楠木朝臣正行が左衛門少尉についたとあるから正行はこの時点ですでに成人になつていなければならないというのである。しかし元年に十一歳なら五年には十五歳、元服してもよい年齢である。因みに北畠顕家が陸奥守に任官して奥州へ赴いたのは十六歳である。

史料がいろいろあつて真偽いすれとも判じ難いが、これ程のロマンを事実でないと片付けてしまうのは危険であり、歴史に対する傲慢であろう。読む者の心を打つ名場面であることも間違なく、文学作品としての『太平記』の面目が見事に現れている所である。だから六百年後の叔母さんの愛唱歌たり得たのである。

五月二十四日、正成は兵庫につき、夜間、義貞の陣を訪ねて酒を酌みかわしこれ迄目ぼしい戦績を挙げ得ず、気落ちしている義貞を慰め励ました。内心死を覚悟している正成が義貞の不運をいたわっているのである。

翌二十五日、義貞は和田岬に陣をしき、正成は湊川に陣した。

尊氏軍が和田岬に上陸すると想定してこれを水際でたたこうと手ぐすねひいていた義貞軍一万は、尊氏の先鋒細川定禪の船団が岬を通りすぎ、東の紺辺（神戸）へ向かうのを見て、京への退路を断たれると思いあわてて東へ移動した。これは尊氏軍の作戦だったのだが義貞はこれにもひつかかって。ガラ空きになつた兵庫に尊氏の本隊が大挙上陸した。小勢の正成軍は敵の大軍の中に孤立した。が全員討死と決めている正成軍は胃の鎧をかたむけ一団となって眼前の足利直義勢の中へ突込んだ。獅子奮迅の正成勢の死闘に押され、数十倍の直義勢は退き、直義は馬を射倒され、家来に助けられてやっと危機を脱した。それを遠くから見た尊氏が「直義を助けよ」と、吉良、石堂、高、上杉らに命じ、楠木勢の背後から襲わせた。午前十時から午後四時まで、敵中を駆け抜けつつ戦うこと十六度、楠木勢はついに七十三騎になり、その七十三騎も悉く負傷していた。

空家になつてゐる民家に入り二列に並び、唱名し火を放つて一斉に腹を切つ

た楠木勢は一族十三人、手の者六十人。『太平記』と『梅松論』ではこここの記述が少々異なるが、修羅場の描写が書物によっていくがうのは当然であろう。義貞軍は東へ奔り、上杉、赤松勢とたたかって敗れ、さらに東へ敗走したが、正成が敵中に孤立していると知ると義貞は狂ったように西へとつて返し正成を助けようとしたが大軍に阻まれて目的を果たせず、再び東へ逃げたと『続本朝通鑑』という書物は述べている。

『梅松論』は足利方の者が書いた書物であるが、正成を讃えて「まことに賢才武略の勇士とは、こうした者をこそいうのだろうと、敵も味方も惜しまぬ人はなかつた」とある。

かねて正成の才能、心術の清廉さ、いさぎよさを尊敬し、少なからぬ好意をもつていた尊氏はその死を悼み、遺族の為に領地を寄進し、菩提を弔つた。

南北朝時代に活躍する多くの武将廷臣の中で正成は際立つて無私無欲の人であつたようだ。正成を死地に追いやつたのは後醍醐帝を取り巻く公卿たちの無能にして氣位ばかり高い連中だったような気がしてならない。

「急ぎ兵庫に下つて尊氏軍を迎撃て」と帝に命じられた時の正成の心境はどんなどつたろう。

私は昔、少壯の日本史の先生から一時間かけてその時の正成の気持ちを忖度^{そんね}した講義を受けた記憶があるが、何しろ半世紀以上前の事なので講義の中味は何一つおぼえていない。

「もはやこれ迄」と正成は死ぬ覚悟を決めたという。壇の浦で源氏に敗れた平知盛は「見るべきほどのものは見つ」と言い、鎧を背負つて海に沈んだ。

西南の役では西郷隆盛が官軍の総攻撃を受けて城山の坂道を下りながら「晋どん、もうこのへんでよか」と声をかけ、そこにどっかと腰を下ろした。「晋どん」とは別府晋介の事である。「心得ました」と彼はこたえ、その場で切腹した西郷の介錯をした。

三人は似た心境だったのではなかろうか。

「臣一人生きてあるとお聞きあらば、いまだご運は尽きぬと思し召せ」と正成はかつて後醍醐帝に奉上していた。その正成が討死の覚悟を決めたのだ。天皇と縁を切つたのである。

湊川の合戦でも血路を開いて脱出しようと思えばできぬことはなかつたし、もし降伏すれば、自分は決して正成を悪くはしなかつたであろうとあとで尊氏はしみじみと述懐して正成の死を惜しんでいる。なのに正成はあえて弟正季と刺し違えて自らの命を断つた。

その心は虚無感としか考えられない。

赤坂、千早城の挙兵以来、彼は文字通り心身を摩り減らして後醍醐の王権確立のために尽くしてきた。しかしそれによつて実現した世は、あまりに心に描いたものとはかけ離れていた。名だたる權臣武將、たとえば千種忠顯、名和長年たちが贊を尽くし、權力を競い、「近頃都ではやるもの、夜討ち、強盗、謀綸旨、生頸、恩賞、虚軍、本領離るる訴訟人」といった二条河原の落書が諷刺する世の中の体たらしくであった。

あの帝の桎梏からも、無能な公卿共の不快さからも解き放たれる、と思ったら急に気持ちが軽くなつたのだろう。

ただ一つ、心に残ることがあった。それはすべてを捨てる自分はよいが、あとに残つて楠木の家名を守り、南朝のためになおも働くものの大変さである。正成は桜井の駅でわが子の正行に万感の思いをこめ後事を託した。わが子の先々の苦労は目に見えている。それでもこんこんと説きその困難に立ち向かわせねばならぬのである。

悲愴な覚悟であった。

事実正行は、のち母の久子と共に健氣に足利方の誘降から楠木家を守り、南朝の為にたたかつた。しかし衆寡敵せず、四條畷^{なわち}で高師直と決戦、討死する。吉野の如意輪堂の木壁に、一族郎党、決死の百四十三人の名を矢尻で彫り

かへらじとかねて思へばあづさ弓

亡き数に入る名をぞとどまる
の一首を書きのこした。



この時後醍醐天皇の皇子、後村上天皇の下にあった南朝は北畠親房が権力を握り、貴族特有のあの観念論で物事を決し、命令を下していた。正行は父と同じ虚無感に陥ってしまったのではないか。

徳川幕府を倒し、明治を迎えた新政府の、薩長出身の、かつての草莽の臣たちが、一朝功成って、顕官となり壇^{いづか}の威容を競い合う豪邸に住み、美妾を蓄え、綺羅の衣服を身にまとい飾った馬車にそりかえって出仕する中、西郷隆盛一人は、木綿の着物に小倉の袴で一僕に弁当を持たせ、てくてく歩いて登廳していたという。

禁門の変から戊申役に至る各地のいくさで多くの人を死なせ、やっと作り上げた新国家がこんな筈ではなかったという西郷の胸中の憤慨、絶望感がそんな形で、そして城山へつながっていったのである。

西郷はある時、病氣の届を出して太政官に出仕しなかった。板垣退助が見舞いに行くと下僕と二人きりで住んでいる小さな家の中で西郷は憂鬱そうな顔をして座っていたが病氣ではなかった。

どうなさいました、西郷先生、と板垣がたずねると、「わしはもうこの世の中どうでもようなりました。わしの言う事など、もう誰もきいてくれません。

北海道へ行つて百姓になろうと思うります。」とこたえた。

明治十年三月、田原坂十八日間の激戦に敗れた西郷軍は、人吉、都城、宮崎と転戦しつつ故国鹿児島へ向かって敗退していく。可愛岳の峻険を巨体で登攀しつつ「よばいのごたる」といって周囲をわらわせた西郷だったが、官軍との小競合いの度に敵弾の飛来する場所に身を曝していたという。撃たれて死のうとしていたようだ。

楠木正行は、後村上天皇から

「勝敗は兵家の常ゆえ、合戦に負けるのは致し方ない。だが死ぬことはならぬぞ」
と釘をさされていたにかかわらず死をえらんでしまった。
「かへらじとかねておもへば」

歴史には、かなしい思いがくり返されている。

藤村清一さんを偲ぶ

山崎文化協会副会長 福岡久藏

かつて、三河村に分町問題が起きた時、賛成意見を書くと反対派から叱られ、反対意見を載せると賛成派から怒鳴られる。日を追うごとに取材に行くのが恐ろしくなったこと。

また、統合して山崎東中学校ができる時も、賛成派と反対派が対立し、一方の意見を書くと他方から叱られ、最後には神戸新聞の不買運動にまで発展して大変困ったこと。

時を経た今、懐かしく話されたことを思い出します。

それは、藤村さんが殊の外、山

崎、宍粟を愛されていましたからだと思います。もっと言えばこの地に理想郷を夢見ておられたのかも知れません。

今思えば、学校が適切な判断と处置をされたので、子供にも先生にも被害がなかった。その喜びが何にもまして大きかったのでしょうか。

山崎、そして宍粟で、いいことや楽しいことが新聞にでるときは、本当に良い顔をされていました。

でも、悪いことや地域の困ったことを記事にしなければならない時は、苦しく辛い思いをされたよう

い。 ありがとうございました。
あなたが描かれた心豊かな宍粟、文化山崎の夢を実現すべく力不足な私たちですが努力いたします。

地域貢献 ふるさとに感謝

NHK大阪放送局長 堂 元 光

(山崎町岸田出身)

「歌声が宍粟の山々に響く」・・・平成二十年十月二十六日、宍粟市で、N H K のど自慢の公開生放送が行われました。「宍粟」というふるさとの二文字が歌声と共に全国に流れた感動的な瞬間でした。のど自慢の開催は、旧宍粟郡時代からふるさとのみなさんのが強い要望だったと承知しています。みなさんの長年の夢がようやく実現し、宍粟市をはじめ関係者の方々に心より感謝いたします。のど自慢の冒頭、「兵庫県宍粟市」の大きな文字がテレビ画面いっぱいに表示されました。そして映像が流れ、アナウンサーが「宍粟材・揖保川・そくめん」と宍粟の特徴をコメント。故郷を離れて四十年、ふるさとの思いがこみあげてきました。公開生放送の一週間前、東京で山崎高校同窓会が開催され、ふるさと談義・のど自慢談義が続いたとも。関西・大阪でも宍粟出身者の間で「懐かしかった。感動した」と語られています。



会長に対し要望書を提出しました。黒田官兵衛と言えば、司馬遼太郎の播磨灘物語の主人公です。昭和五十年代に、この小説を一気に読み上げた記憶がありますが、司馬遼太郎の播磨に対する愛着・思いがひしひしと伝わってきます。播磨が輝いてみえます。黒田官兵衛は姫路生まれで、豊臣秀吉の軍師。本能寺の変を知るや、中国攻めの秀吉に対し、「中国大返し」を進言し、秀吉の天下とりに大きく貢献したと伝えられています。宍粟市山崎町は、当時、官兵衛の領地となり、鹿沢に拠点が置かれたとも言われています。司馬遼太郎が、その著書「街道をゆく」の「播州揖保川・室津みち」で紹介しています。「街道をゆく」がNHK教育テレビで放送された際、画面に映し出される山崎の城跡や街並み、揖保川の姿を今でも鮮明に覚えていました。ただ、官兵衛の領地山崎をいまに伝える痕跡が何ひとつ残っていないようで残念でなりません。

大河ドラマをめぐっては、全国各地でさまざまな誘致運動が展開されています。武将だけに限っても、藤堂高虎、北条早雲、保科正之等々きりがありません。大河ドラマを地域活性化の起爆剤にしようという発想がそれぞれの地域に



あることも否定できません。第二の人生は、官兵衛ドラマの実現をライフル一
クにし、ふたたび「ふるさと宍粟」への恩返しにつながれば・・・。最後にな
りますが、NHKは地域のみなさんのご支援を頂いて成り立っている以上、地
域に貢献するのは当然のことです。歌番組もあればドラマもありますが、視聴
者・国民ひとりひとりの命と暮らしを守るニュースや番組、地域の今を検証す
る報道番組、地域の人々を豊かにする紀
行番組、「元気出せ関西」を応援する地域
経済番組等々、地域放送を一層充実・強
化していきます。ご理解ご協力をいただ
ければ幸いです。



著者のプロフィール

昭和26年（1951年）生まれ。
河東小学校、神河中学校、山崎高校を経て、早稲田大学法学部卒。
昭和49年NHK（日本放送協会）入局、北九州放送局等を経て、昭和54年報道局政治部。
総理官邸で大平総理番、自民党や野党、国会、外務省や防衛庁を担当。
平成12年政治部長、17年報道局長、一貫して政治記者として報道畑を歩む。
18年より現職。

第三十回春の芸能祭ご案内

日時 平成二十一年五月十七日（日）

午前十時から

場所 宍粟市山崎文化会館（サンホールやまさき）

主催 宍粟市山崎文化協会・助山崎文化振興財団

後援 神戸新聞社・宍粟市教育委員会・宍粟市

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいよう、
ご案内申しあげます。

参加部門 山崎詩舞道連盟 山崎邦楽邦舞研究会

さつき民踊グループ 山崎民謡連合会

その他宍粟市内より賛助出演

短歌と私

柏野短歌会 菅谷美津子

山や川の姿 虫の声 草花の色や
香り 月や星の美しさ 雲の形の面
白さなど 春夏秋冬の四季それぞれ
に自然の雄大さ 繊細さを、また人
の世の喜怒哀楽をわずか三十一文字
で書き表わす短歌の奥深さ、幅の広
さ、これらは心豊かに生きようとす
る日本の文化ではないでしょうか。

短歌といえば

私が女学校時代、お正月に楽しんだ百人一首の中の何枚かを深い意味も解せぬまま得意の取り札としたことをなつかしく思い出します。“しのぶれど色にいにけり……”とか“天つ風 雲の通ひ路……”とか。そうしたなかしい百人一首の中からいくつかを取り出してこれらの歌を詠んだ昔の人たちの心に、私なりにほんの少しでも近付くことが出来たら幸いです。

田子の浦に うち出でて見れば

富士の高嶺に 雪は降りつつ

白妙の

小さな人間の大きな感動を、素直に表現したスケールの大きな歌だと思います。

『橋掛り』は先生が平成十六年に出版された歌集です。その歌集のあとがきに

「齢すでに九十四歳、諭えて恐縮ながら能の演者が今“橋掛り”を切幕に向かって入りつつあるところでありましょうか」と記しておられます。

おおらかな悟りの心につつまれ定めを澄んだ心で見つめる詠者の、わが身よにふる ながめせしまに人にはどうにもならないこの世の切ない諦めの気持ちが優雅に表現されていると思いますが、どこかに吾が身の春をしのび老いてゆく吾が身へのいとおしさが感じられる歌と思うのですが。

この様に優れた歌人たちの歌を取り上げ感想を述べるなど生意氣とは思いますが、短歌の鑑賞は読む人の心が十人十色に感じとれる。深さ広さがあつてそれがまた短歌の面白さではないでしょうか。

最後に私たちの恩師であります稻村先生の一首をお借りしたいと思

自然の雄大さを目の当たりにした西方は十万億土すり足にわれの一世やいま橋掛り

『橋掛り』は先生が平成十六年に出版された歌集です。その歌集のあとがきに

「齢すでに九十四歳、諭えて恐縮ながら能の演者が今“橋掛り”を切幕に向かって入りつつあるところでありましょうか」と記しておられます。

おおらかな悟りの心につつまれ定めを澄んだ心で見つめる詠者の、わが身よにふる ながめせしまに人にはどうにもならないこの世の切ない諦めの気持ちが優雅に表現されていると思いますが、どこかに吾が身の春をしのび老いてゆく吾が身へのいとおしさが感じられる歌と思うのですが。

この様に優れた歌人たちの歌を取り上げ感想を述べるなど生意氣とは思いますが、短歌の鑑賞は読む人の心が十人十色に感じとれる。深さ広さがあつてそれがまた短歌の面白さではないでしょうか。

最後に私たちの恩師であります稻村先生の一首をお借りしたいと思

高低差三百メートルの山麓部と、山上部をつなぐ、ミニモノレールの急坂に、ひととき童心に還る。

。登りゆくほどに虚空の近くなる頭の上にあそぶ浮雲

。大山の見ゆるとふ声手びさしに望む彼方に残雪の山

伊東まさ子

。風の子となりて遊べる園児らの声

伊東まさ子

。栗山 節子

。窓に目を向けたとき、ピンクの山茶花が“ごくろうさん”とほほ笑みかけてくれました。

。窓に目を向けたとき、ピンクの山茶花が“ごくろうさん”とほほ笑みかけてくれました。

釜付 靖子

。天空へつづく軌道をゆく如くミニモノレールに身を委ねをり

伊野 和子

。その由来友に聞きたたり比地の滝目差して登る小暗き径を

栗山 節子

。頂上より西北に見ゆるわが母校学びし頃の思ひ出さるる

小林ハマ子

。里桜両側に登るモノレール窓に展ける比地の眺望

佐々木タエ子

。木木芽吹き生命一ぱいに生きている国見の森は千金の宝

嶋田 操

。国見山の頂上めざすゴンドラが三

十八度の勾配のぼる

杉本 幹子

国見山の登れる記念に拾ひし石そつ
とリュックに忍ばせ下山す

高井 麗子

国見山登りきたれば目の下に揖保
の流れの細く続けり

谷 瑞木

義経の逆落としほどの銳角かモノ
レール恐や急坂くだる

田峰 定子

ここ比地に鍬を振りたり女学生勤
労奉仕にわれら來たりて

戸田 葉月

お茶菓子の爪楊枝なる黒文字が国
見の森に輝きて生ふ

南光美代子

国見山のその名のごとくわが住める
城下平野一望にする

西川スズ子

青き空めざして靜靜のぼりゆく登
山電車にどんぐり転ぶ

土方 君子

比地の滝見あぐる狭き視界より五
月青葉の光差し入る

前田ゆき子

雉鳩の鳴きつつ翔ちて山桜かすみ
て浮かぶ里の山山

安政 嘉子

このあたり松茸とりしと夫の言ふ
国見の森の散歩道ゆく

宍粟市長賞
結納という習わしに家をつぐ男孫
の肩幅日々にたのもし

山口 澄代

傾斜角三十八度のモノレール木々
の芽吹きもつぶさに見ゆる

宍粟市議会議長賞
寡黙なる夫とふたりの長き冬去ら
んか日差をあびて草ひく

久保みや子

風の筋見えて軌道に散るさくらこ
の頃季の移るが早し

森下 達子

山頂より見るふるさとは東方に峰
ふもとの小さき集落

田路 和子

山崎 智絵

短歌祭入賞入選作品

◇第四回宍粟市民短歌祭

(九月七日・宍粟防災センター)

兵庫県知事賞

ゲートルを巻きて戦場を駆けたり
き病みいる父の足の爪切る

阪口 廣子

この町の馴染みの本屋も閉ざされ
てコンビニの灯のあかあか点る

向う

菅谷美津子

紫にいのちの匂い思わせてアヤメ
は美しき姿をとどむ

丸井 敏子

植ゑるのか腐らすのかと箱の中こ
んにやく芋は角のばしるつ

◇西播磨短歌祭（平成二十年度）
(十月八日・西播磨文化会館)

西播磨県民局長賞
雑草がじわりじわりと狭めゆく遊
ぶ子供の減りたる広場

岡本 光代

兵庫県芸術文化協会賞
半そでの袖口くぐり背にぬける風
を楽しみ自転車をこぐ

菅谷美津子

宍粟市教育委員会教育長賞
伸びのびと空に尾を引く飛行雲病

田路 和子

山崎 智絵

宍粟市議会議長賞
伸びのびと空に尾を引く飛行雲病

鈴木 喜市

宍粟文化協会長賞
宣告を受けたる日より白紙なる癌

伊東まさ子

「お早よう」と朝の挨拶する夫の
声に逝きたる夫の日記は

向う

伊東まさ子

宍粟歌人連盟賞（山崎町のみ）

定まらぬ思考のひとつ揺れながら
に逝きたる夫の日記は

山本 正子

黙ふかき冬の木立に入りゆけば芽
吹にそなう木々の精気は

向う

伊東まさ子

黙ふかき冬の木立に入りゆけば芽
吹にそなう木々の精気は

向う

菅谷美津子

ふんわりと薄くれないに包まるる
生きて幾たび赦さるる春

佳作

俳

句

山崎俳人協会

青嶺句会 田 中 良 子

沙羅の寺を訪ねて

青嶺句会は、歴史と伝統を大切にしながら、月一回の句会と春秋の吟行をしております。

本年は地域の文化を再発見しようと言うことから、「沙羅を愛でる会」を六月二十五日催しました。

会員十三名中十二名の参加で、十時に遊鶴山明源寺に集合する。梅雨の最中ではあるが、幸いにも晴れ間のある天気となり、当寺の坊守さんで又句友でもある美保子様が笑顔で出迎えて下さる。そして沙羅の庭へ。

・佛足の一幅掛けや夏座敷 光 子
・手入れよき寺園は静か緑濃き 君 子

・白無垢の沙羅の散りしく苔の庭 茂 太

・方丈の広き濡れ縁沙羅の花 榮 子

お茶をいただきながら、杉苔、花苔の神秘な美しさにひかれつつ、緑

濃き絨毯に純白の沙羅の花が落下しているのも中々の風情ある眺めである。

・ういういしく一日限りの沙羅の花 延 子

・はなれたるとき沙羅は散り時は過ぐ 緑 山

・沙羅咲きて至福の刻を過ごしおり 美保子

・寺の屋根反り美しく沙羅の花 泊 水

・矢の如く巡る月日や沙羅の散る ゆ き

坊守さんに、当寺の古来の仏具等

についても、私達には珍らしく、お尋ねしたり、又触れさせていただく。

・回廊の木版古び沙羅の坊 とみ代

・木版の文字解いており夏椿 チエノ

・坊守の木版打つ音さらの散る

良 子

吟行を兼ねた「沙羅の会」も無事十二時で終え、仏足のお軸あやかる座敷にて昼食をする。お互いに快い疲労感をみせながら、それぞれの思いを語り合い和やかなひとときを過ごす。そして聖人在わす沙羅の寺をあとにした。

青嶺句会詠草

梨を売る街道筋の國訛り

秋久 光子

冬の実の朱色極めて豊かなり

大谷 延子

髭を剃る刃先ひやりと寒き朝

門積 緑山

冬の海風を食らひて猛りけり

茂田 茂太

朝寒や雨をふふみし供華を剪る

下村 君子

不揃ひいのむかごの味や素朴なり

杉山美保子

ぐずる子を送りて朝の寒さかな

田中 良子

道祖神峠におわし冬ぬくし

鳥羽チエノ

気にかかる切れし電話や冬の夜

藤井 七代

凍蝶の生あるごとく翅合せ

山岸 園子

過疎の里守る如澄みて冬の月

山盛りの梨の店立つ國境

福田 泊水

嘶きを忘れし神馬朝寒し

山口 榮子

山脈句会詠草

彼岸花朱に埋もれて鍬洗ふ

浅田 蕪耕

雨降らず露草楚々と溝ほとり

池田 陶瓦

玄室は薄湿りして残る虫

宇野 幸子

命脱ぎし軽さに吹かれ蛇の衣

栗山きよみ

晴天や飛竜乱舞の大野焼

高田 治

夏瘦せの顔に濃いめの紅をひく

竹添寿美子

冬ざれの群峯足下に眠りたり

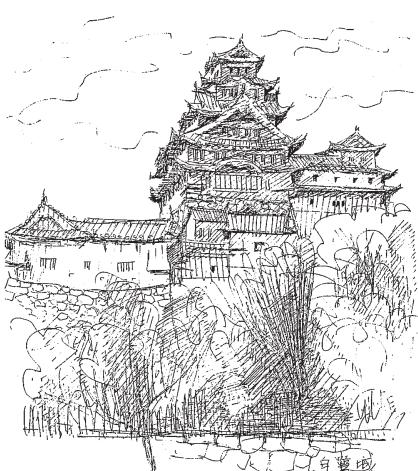
田中めぐみ

突き出せし男の腕夏宿る

西田 宣子

雲一朶夕日に映えつ山眠る

福田 祥栄



白牡丹句会

味付けは薄めと決めて年用意

井口 洋子

誰彼と会ふ氏宮の初詣

宗平 圭司

山茶花が雪の下から微笑を

福井 清子

天上の雲はゆっくり花野まで

三浦 ゆき

梵鐘の余韻の長き初詣

鳥羽 千恵

鹿の声闇を動かし遠ざかる

千種 洋子

何もせずとも気のせわし師走かな

坂井 弘昌

いざれ散る桜に人のなびきけり

松本 壽子

やまさき老人大学で、当時九州大学医学部医学博士 田畠正久先生が次のようなお話をなさいました。
「生老病死（四苦）、愛別離苦（愛する人と必ず別れなければならぬ）・怨憎会苦（憎しみや恨みのある人と必ず会わねばならない）・求不得苦（欲しい物がどうしても手に入らない苦しみ）・五陰盛苦（執着によって起こる精神的・肉体的なさまざまな苦しみ）の四つをあわせて四苦八苦、よく使う言葉です。」この先生が講演先で会場の皆さんに「長生きしたいですか」と問い合わせると「長生きしたい、病気せず元気に長生きしたい」と答えが返ってくるそうです。

人間は幸せを求め老病死は①要素に若々しく元氣で長生きすることを②要素にして、③要素を下げ④要素を高めることが幸せと考えている。私もその一人ですがこれを餓鬼畜生、智恵がない「凡夫」といいます。

歳のとり方を学ぶ

山崎謡曲同好会

柳 田 薫

老いて訳の分らないことを言い始めると、普通世間ではボケ、今では認知症が始まっと言うがアイヌでは「神の言葉」を話し出したという。

また、老人のことを「長老」とも呼びます。よく考えてみると、人間に生まれ老いて行く、病にも罹りやすくなる、そして死をむかえる。これは自然の摂理であり、老いることは「成熟する」「完全燃焼する」ことだ。

老いることを嘆かず喜ばしいことと受け止めるべきです。

今、医学界では八十才以上の高齢者、高血圧の人には血圧を下げる薬はアルツハイマーにかかりやすい副作用があるのでなるべく与えないようになっているそうです。八十才まで生きたことに感謝し、①要素を下げ、②要素を高めよう等、考えないで、自分の周りに生じた「喜び」も「悲しみ」も全て「ご縁」、私達を成熟させるためのご縁であると悟らせていただき「お陰さまと感謝のできる人格」になろう。これが仏様から戴く智恵だ。というようなお話をでした。私も八十才に近づいた今、凡夫にならないよう、心して日々を過しているところです。

平成二十年度

研修旅行に参加して

山崎郷土研究会

宗 平 圭 司

晴天に恵まれた去る十月二日、今

年度研修旅行は三十四名の参加者が
次の四か所を巡った。

○県立考古博物館（播磨町）

幸運にも文化庁主催の「二一〇〇八年発掘された日本列島」展が開催されており、貴重な内容の展示の数々を見ることができた。中でも高松塚古墳の壁画が保存・管理中、カビの発生や壁画の劣化が進行し、昨年この保存と修理のための石室の解体作業が実施され、その様子や墳丘の構築方法等、新たに確認された古代技術が紹介されていた。また実物大の石室が作られており、その中を通り、左右及び天井の壁画を見て改めて感動した。

次に世界遺産の石見銀山遺跡展を見学した。この文化的景観として、出土品だけでなく地図や絵図を含め、往事の石見銀山の様子も見ることができた。

その他にも数点全国各地よりの出

土品が展示され、当館の学芸員より丁寧に説明を頂いた。

○丹波恐竜発掘現場（丹波丹南町）
(大中遺跡・篠山城址省略)



草木に親しむ

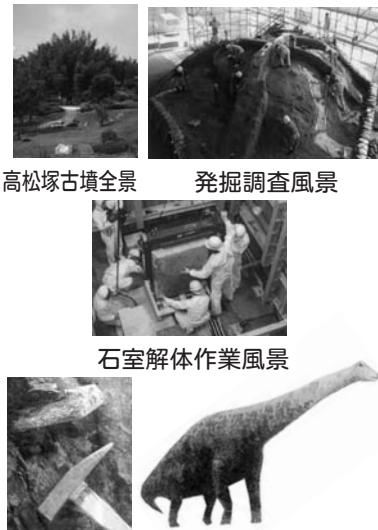
山崎植物同好会 新 谷 禅

年三月の間、第三次発掘調査が計画されており、概ね全長約二十七メートルの草食恐竜の全化石が発掘されることが予想されている。当日第一

発見者の村上茂氏に現場において頂き、平成十八年八月七日の世紀の大発見の様子を詳しく説明頂いた。予定の時間をオーバーして、質疑も長時間におよんだ。

紙面の都合上内容の紹介を出来ないのが残念である。一億三千年～四千年前のロマンに浸りつつ、有意義な研修を終え帰路についた。

(写真は最初に発見された化石と高松塚古墳の解体等及び石見銀山遺跡)



私が植物同好会に入会したのは、平成四年頃だったと記憶しています。あれから十七年、私の記録によると、六十カ所近くの観察地で、五百種以上の植物を見てきました。

最初のうちには、知っている植物の数も十指で数えられる程度でした。今ではその十倍を越えていると思っています。(見た数と知っている数

の差は名前を見ても現物を思い出せない物が多い) これは同好会の先生方の御指導によるものでして、初めての頃は、見る花もほとんどの名を聞いていたものですが、最近では聞く回数がずいぶん減ってきました。

植物の名前を知ったところで何の得もありませんが、名前を知ることによって花に親しみを覚えます。それ

に昔の人の知恵でスギナとかカキドオシを煎じて飲むと糖尿病に効果がある、タケニグサは、ひどい中毒症状を起す等、薬効、いわれなども覚えられます。

今後も会に参加して山野を歩き、その時々の旬の植物に出会い、自分にとっての新しい発見に喜び、驚き

楽しんで行きたいと思っています。

歴史の禍根を探る

新潮会
田中義弘

近年、宍粟民謡は唄われなくなりましたが、かつては山崎小唄と宍粟民謡はイベントや盆踊りには必ずといつてもよいほど唄われていた記憶が残っております。野口雨情作詞、中山晋平作曲で昭和七年に発表されたものです、一番から五番まであって最後の歌詞はすべて「播州宍粟は山の国アリヤ山の国」となっていて、それは何を意味するかであります。宍粟はそれだけ山の国、山林、森林王国で名を馳せていて、従って当時郡民の願いとして道路整備や運輸、交通機関を如何に誘致し地域を良くし発展させて行くか昔からの念願で真剣に考えていた証ではないかと思わざるをえません、今でも時折、市民の方々から宍粟に何故、鉄道が敷設されなかつたのか、又先人達は何故、推進運動など力を入れられなかつたのかと言うことを耳にすることがあります。



旧街道を行くトラック（昭和28年）

に播磨電気鉄道株式会社が設立され、宍粟郡の有識者が一丸となって、新宮から山崎、鳥取若狭までの間に鉄道を敷設する計画がなされ、昭和十年までの九年間、度々会議を重ね国県に対して陳情や要望をされ地元が資金計画の調達までして、予定路線の測量までされた経緯があります。しかし当時は牛馬の荷車（馬力車：昭和三年で山崎だけでも一三九台）や陸運業者その他の方々の強い反対に押され、やむなく計画は断念し、播磨電気鉄道株式会社は解散した歴史が残っております。

当時、旧山崎町の予算が十万円、鉄道敷設概算予算が五十万円必要で三十万円は株主が負担し不足する二十万円をどうするかという問題もありましたが、反対する人々に負けて鉄道が敷設されず道路のみとなり現在バス路線も大半が廃止となり足を奪われている現状を見たとき歴史の禍根を残す結果となつたといわざるを得ないわけです。やはり声高の強い反対があつてもサイレント・マジョリティーカノイジー・マイノリティーなどのかよくさばきわけ宍粟の将来の発展のために、ここ一番というときは勇気と決断をもつて初志貫徹すべきであったのではないでしようか。

一例をあげると中学校の統合問題です。昭和六十年当時反対の声が少なからずあり役場の廻りにムンロ旗を揚げて反対運動が展開されました。現在どうでしょうか、反対していた人々も市民の誰もが中学校の統合をしてよかつたと思われているのではないかでしょうか。少子化による児童、生徒数の減少、学校の維持管理経費、その他、市財政全般を考えたとき今になれば統合は正しい選択だった、よかつたと評価すべきではないでしょ



暮らしの荷を運ぶ常便さん（昭和37年頃）

うか。当時の町長や議会、行政機関に係わる方々の勇氣ある決断に絶大なる賛辞をくりたいものです。将来に禍根を残すであろう反対は、そこそこにすべきであるという教訓とにして受けとめたいものです。

隨想一筆

山崎開幕同好会

仲田耕治

「論語」の学而編に

子学びて時に之を習う。亦悦ば
しからずや。朋有り遠方より来る。
亦樂しからずや。人知らずして愠
(憤)らズ。亦君子ならずや。

大意は時々學習(復習)するのも
歎びが湧いて来る。遠方から友が來
て基盤を囲んだり語り合うのもとて
も楽しいことではないか。会うのも、
一局盤にお互いが向い合うのも楽し
みではないか。人を本当に知ると言
うことはむずかしい。況や自分を人
に理解して貰わなくとも怒らずそ
ういう人も立派な高潔の士と言うの
であろう。

文化会館にては、絵画、書、陶芸
等の展示がある。それらの名作を眺
めては、作者(出品者)の心の美し
さや豊かさ、温かさに感銘を覚える
のである。健げなる向上心や努力の
跡に感嘆するばかりである。日本には
四季折々の美しさが満ちている様
に思われる。

「万葉集」の歌に

綿つ海の豊旗雲に入日さし今夜の
月夜明らけくこそ

大意は、浜辺に立って見渡してみ
ると、広々とした海の上には大きい
旗の様な雲がなびいており、それに

赤く夕日が差している。この様子か
らしてみると、今夜の月は明月のよ
うに明るいことだろう。

今、紅葉の季節である。宏栗の山々
の紅葉も限り無く美しいことであろ

う。特に觀光地名所まで遠く足を運
ばなくとも私達の周辺の山々にも見
事な素晴らしい紅葉を眺め楽しむこ
とが出来る。自然の美は私達の手の

届く距離に至る所に散在しているの
である。紅葉の美あり。音水、赤西
ならずとも、渓谷が岩をかんで流れ
る急流あり、ゆつたりと流れる揖保
川の渕がある。

一期一会

山崎茶華道連盟

阪本喜美枝

去る十一月五日に「青少年を守る
会」の一環として、お茶の指導に三
土中学校へ行きました。二年生十八
名と先生・父兄を入れて二十五名程

を対象に、「お菓子のいただき方」「
お茶のいただき方」をメインにそ
の前に少しお茶について話しました。
ある人が私に「二十年も三十年も一
体何を教えよんや。あんなもん十分
か二十分あつたら覚えられるやろ」
と言われた事から話を興して、茶
道とは、おもてなしの勉強で、しか
も一期一会のおもてなしであること、
「このお客様とはもう二度と会えな
い」と思うと、おうちもきれいに掃
除したり、きれいなお花も活け、ど
んなお道具でおもてなしをしようか
と一生懸命考えてお迎えの準備をす
るでしょう。お客様の方もそんな亭主
の気持ちに応えて、お花やお菓子、
お道具の事等、亭主の心遣いについ
て感謝を表わし、亭主と客の心が一
体になり、どちらも「今日は楽しい

おもてなしだった」と満足出来る様
なもてなし方の勉強をしている事等、
具体例をあげて話しました。

その後、利休さんの逸話で、ある
茶人が利休さんをお招きしたのです
が、緊張の余り、柄杓の水をこぼす
は、茶筅を倒すは、散々なお手前を
したのですが、利休さんは、「今日
のお点前は天下一でした」とほめら
れたのです。お弟子さんが「あんな
お点前がどうして天下一なのですか」
とたずねると、「あの人には私達にお
いしいお茶を点てようと一生懸命だっ
たのです。その気持ちが大切なので
す」と答えられた話しをしました。

それまで笑顔だった子供達の表情が
一瞬キッと引き締まりました。
その後、亭主と客の二班に分かれ
て、お菓子とお茶のいただき方の実
習をしました。みんな楽しんでやっ
てくれました。

「あなた方と私は本当に一期一会
だと思います。どうぞお元気で」と
挨拶をして別れました。

後から感想文を頂きましたが、私
のつたない話をよく理解してくれて
いて、感動致しました。

合唱団での思い出

山崎児童合唱団



塚田竜士

ぼくが一年生で入団した時、男の子は一人でいつも話し相手がないくてひました。今は、ぼくを合わせて三人男の子がいます。でも六年もたつと、女の子ともしゃべれるようになりました。

にもなっています。やっぱり続けることは大切だと思います。

ぼくはこの六年間でいろんな事を教えてもらい、続けることの大切さがわかりました。

この六年間夢と希望をありがとうございました。

幸嶋潮

合宿の中で

定期演奏会に向けて夏からみんなで合唱やミュージカルの練習をするのです。合唱では、きれいな声を出すのが大変です。初めて役をもらった時、自分にできるかどうか心配でした。でも、友達がいっしょだからが

ビックリしたこととは花火で最後に打ちあげ花火が上がったことです。ビックリしました。



んばれる気がしました。できない所は先生に何度も教えてもらって練習しました。

定期演奏会の当日、本番ではうま

くできたと思います。みんなで声を合せて歌うことは、とても気もちよかったです。終ってしまったちょっとさみしいです。みんなと力を合せて定期演奏会が成功したことについてもわすれずにいたいです。

林享香

私の合唱団での思い出は合宿・定期演奏会です。合宿ではすごくしないかたりしたけどみんながんばっているので私もがんばろうと思いました。でも夜はみんなごはんを食べたりおふろに入ったりねたりしました。すごく楽しかったです。一番

昭和五十四年五月、旭町婦人部有志で設立された、さつき民踊グループ、その会に私も入会しました。会員の方々は私より一廻りも年の上の方ばかり、踊りを通していろんな事を学びました。当初は山崎さつきマラソンが発足したころで、マラソンのイベントにたびたび、山崎町の行事等にも山崎小唄、さつき音頭をいろいろな所で踊らせて頂きそれがボランティアの始まりでした。

太才神社の藤まつり奉納舞も十七年間続け、そうしている間に先輩のリーダーが山崎文化協会に入会できるよう申し込みを二年致しましたが十年近く入会を認めてもらえず、やつと六十三年七月に入会を認めて頂きました。

その間どこかで発表の出来る場所をと各グループの方々と考えておりましたところ、当時の町長さんが力を貸して下さり、立ち上げる事が出来ましたが現在の山崎秋のふれあ

民踊一筋三十年

さつき民踊グループ

西川慶子

このように先輩達の力で築き上げて下さった、さつき民踊グループも当時の会員は、私一人になりました。

い文化祭です。

現在、坂東寿賀幸先生の指導のもと厳しさも笑いでごまかし、歳だから仕方がないかと自分で納得してしまうからあまり上達もしません。三

十年間、よく続けてこれたのも、すばらしい先生に恵まれた事、家族の理解、協力、健康があつたからこそと感謝、また常にすばらしい仲間に助けてもらつたからである。

現在十名の会員で一曲一曲楽しく踊れるよう心掛け、ボランティアで頑張って行けたらと念願しています。



感謝状に感謝

山崎美術協会

福岡久藏

宍粟市美術展がはや四回展を終えることとなりました。一年一年それぞれに色々なことがありました。

新しくできた防災センターで初めて展覧会をする時、一階のフロアーガラスや床に傷を付けてはいけないと、ベニヤ板を敷き詰めて、パネルを運んだことがありました。

第三回展では、他の町展で賞をとった作品を宍粟市展にも出品し、再度賞を取るという普通では考えられないことがありました。でも、最近では、他人の作品をそつくり真似たり、同じ作品をあちこちに出品したりする人が中央にもでてきたという話を聞きました。情けないです。

そして、第四回展では書の部の出品作品が十一點しかなかったことで、昔から宍粟は書が盛んなところで、書を習う人も多く、レベルも近隣地区の中では抜きんでていました。一時は出品作品が六十点を越えることさえありました。それだ

けに淋しいことです。

書の審査をしていただいた伊藤一

翔先生が「塾の先生が出せと言われば出す。出すなと言われたら出さない」という古い感覚が書の世界ではないところです。書のこれから課題といえるでしょう」といわれていました。

また、嬉しかったこともあります。白谷市長から藤原義弘さんに感謝状が贈られたことです。

藤原さんは山崎美術協会入会と同

時に赤字決算という会計をまかされたり、田中武さんが亡くなられてからは事務局を一手に引き受け、二十一年余り、一言居士の多い美術協会を支えてこられました。

その間には山崎町美術展の会場が文化体育館から山崎防災センターに移ったり、山崎町美術展が宍粟市美術展に変るなど、色々と変遷がありました。その時々に適切な対応ができたことは事務局のお蔭ですし、それが評価されたことは本当に良かったと思います。

感謝、感謝です。

平成会二十周年を迎えて

平成会

壺阪興一郎

平成元年に、新潮会の一世を中心上を目的として平成会が発足して、二十年がたちました。

平成会二十周年を記念して、平成二十年十月十八日「クラシックをより身近に」をテーマに、様々な活動を続けておられるヴァイオリニスト高島ちさ子さんが編成された、観ても、聞いても、美しく、楽しいヴァイオリン・アンサンブル「高島ちさ子 十二人のヴァイオリニスト」を

招聘し、市民の皆様にクラシック音楽を楽しんでいただくコンサートを開催しました。また同時にチャリティーを実施し多くの皆様より温かいご支援をいただきました。

発足当時の平成元年(西暦一九八九年)は、バブル経済の初期の頃であり、又消費税法が施行され三%の消費税が登場したときでもあります。

世界に目を向けると、ベルリンの

壁が崩壊し「ポスト冷戦時代」を迎えた、世界の秩序が大きく変わるときました。

このような時代の元、平成会は十数名で発足しました。現在は二十九名で毎月例会を開催して活動しています。

平成二十年度は、四月に「山崎ウォーキング&ウォッキング」に参加し、山崎八幡神社で「能舞台コンサート」

を実施、六月には地域の子供たちに農作物の収穫を体験していただき、「ジャガイモ掘り」を実施、十二月には恒例になりました山崎八幡神社での「カウントダウン」を実施してきました。また例会では、研修、会員相互の親睦を図って参りました。

た。

今後も、私たちの住んでいる地域の文化の発展と向上を願い、地域の皆様方と共に歩んでいきたいと思っていきますので、よろしくお願い申し上げます。



人生と趣味

山崎邦楽邦舞研究会

石野和雄

夜もまだ明けやらぬ戸外に出ると、
師走の冷たい風が肌を撫でてとおる。
あたりはまだ暗闇の世界である。

それでもいつかは夜の明けるのを
信じて歩いていると、間違ひなくい
つもの場所にきて、東の空の山の稜
線が橙色になってくる。まさに夜明
けである。地球誕生以来変わること
なく続いている自然現象であるが一
瞬たりとも静止すること無いこの大
宇宙の星の一つである地球、その中
の生物の人間の存在の如何に小さい
ことかとしみじみ思われます。そし
て終る一生も永いようで短い一瞬の
ような時間ですが、授った命を大切
に、唯「無為徒食」で過ごさず、や
がて終る一生を大切に有効に使わな
いと惜しいと思います。自分に合っ
た趣味を持ってそれを続けてみたら
いかに楽しく暮らせることでしょう。
後戻り出来ない時間を大切にしたい
ものです。何でも手近にあるものを
利用すれば良いことで、むずかしい



ことなど考えなくても、美しい自然
の四季のある山を歩いてみてはいか
がでしょう。幸い山崎町には最上山
公園があつて、いつでも誰でも自由
に散歩出来ます。山歩きも体に最も
良い趣味の一つです。又、それを繼
続することが大きな力となります。
知らず知らずのうちに、何か得るもの
があるように思います。誰も一様
にとは申せませんが、何か一生通じ
て、趣味のあるのと無いのとでは、
幸福感の差が出来ると思われます。
何を見ても美しいと感じ、有り難い
と思えば、楽しい人生をおくること
が出来るのでは無いでしょうか。

人生を旅人に例えるのは旅人が多
くの人と出会い別れの繰り返しの中
で織りなす喜怒哀樂が人生に似通っ
ているからではないでしょうか。

私が詩吟と出会ったのは昭和四十
三年頃、近所の中瀬幸蔵先生が詩吟
道場を開かれたとき、夜の時間をゴ
ロテレでなく有効に使いたいとの思
いで入門したのですが先生は測量の
技術習得のため九州へ赴かれ、僅か
一年のお付き合いでした。その後正
木賀碧先生に八年師事し亡くなられ
た後は大会等で出会う達人を見習っ
て今日に至っております。

当時は詩吟ブームで篠の丸吟詠会
員一二〇名、山崎詩舞道連盟六百余
名と賑わっておりましたが、今では、
篠の丸三十名、詩舞道連盟一五〇名
と激減してしまいました。何とか現
在の会員を維持し、一人でも増員し
たいとの思いで踏ん張っております。
私がこの年度、特に力を入れたのは
老大詩吟部の復活でした。途絶えて
から十数年となりますが、『明るく、

出会い

山崎詩舞道連盟 小田博己

人生を旅人に例えるのは旅人が多
くの人と出会い別れの繰り返しの中
で織りなす喜怒哀樂が人生に似通っ
ているからではないでしょうか。

私が詩吟と出会ったのは昭和四十
三年頃、近所の中瀬幸蔵先生が詩吟
道場を開かれたとき、夜の時間をゴ
ロテレでなく有効に使いたいとの思
いで入門したのですが先生は測量の
技術習得のため九州へ赴かれ、僅か
一年のお付き合いでした。その後正
木賀碧先生に八年師事し亡くなられ
た後は大会等で出会う達人を見習っ
て今日に至っております。

『青春とは人生のある期間でなく
心の持ちかたを言う。(中略)とき
には二十歳の青年よりも六十歳の人
に青春がある。年を重ねただけで人
は老いない。理想を失うとき初めて
老いる。(中略)二十歳であろうと
人は老いる。頭を高く上げ希望の波
をとらえる限り八十歳であろうと人
は青春にして已む。(サムエル・ウ
ルマン)』

二十一年度は老大詩吟部として登
録されると思っております。腹の底
から大きな声を出して若返ろうでは
ありませんか、もしかして詩吟を通
じ、あなたと出会えるかも:そんな
期待で胸を膨らませています。

町民合唱の「ひでこう

山崎町合唱連盟

藤井七代

一〇〇八年十一月三日第十八回
秋のふれあい文化祭に出場させて頂
きました。

指揮 栗山祐子先生

伴奏 長井美江先生

曲目 「ハナミズキ」 女性合唱

作詞 一青 窓

作曲 マシコタツロウ

曲目 「時無草」 女声合唱

作詞 室生犀星

作曲 磯部 偲

先生方には、年を追う度に故障が
続き止むなく一人欠け二人欠け淋し
くなる町民合唱に対し、以前に変わ
らず真摯なご指導の上、ご自身も歌
う事が好きだから…と歌う一員にも
なって下さる暖かいお人柄に改めて
感謝と敬意を表します。そのご苦労
に報いたいと一同心している処です
が、一部の方々を除き御多分にもれ
ずなべて高齢化の波はしづかに寄せ
てくるようです。長年歌い続けてき
た私達にその意志はあっても身體面

に仲々伴わない部分もありハーモニー
させ楽しく歌えればいいでしようと
むずかしいところです。努力が足り
ないのかと反省もしきりです。でも
明るく前向きにがんばっておりまます。
その後の予定は次のとおりです。

十二月七日

ふるさとの心を歌う

西播磨音楽祭 太子あすかホール

曲目 「落葉松」 混声合唱

作詞 野上 彰

作曲 小林秀雄

二〇〇九年三月一日

しそうの森合唱祭

山崎文化会館サンホール

曲目 「雪が降る」 混声合唱

作詞 まどみちお

作曲 山岸 徹



和太鼓の魅力

和太鼓音羽 上長弥生

私が和太鼓に出会ったのは、今か
ら十年余り前です。一宮町の町制四
十周年記念行事の一環として和太鼓
演奏の企画が持ち上がりました。町
民に対し、「和太鼓をたたいてみま
せんか」という募集があり、迷うこ
となく申し込みました。それは、私
の中に、和太鼓の音にひかれる何か、
また太鼓への憧れがあったからです。

五十代の私が小学生の頃、鼓笛隊
がありました。楽器のパートを決め
る時、なぜか大太鼓に興味を持ちま
した。しかし、大太鼓は体格のいい
元気な男の子が選ばれ、おとなしい
体の小さな女の子には無理でした。

それが、何十年もたつてから、「年
令・男女問いません」とあるじゃな
いですか。四十代になつていました
が、飛びつくように始めました。
一宮では、鬼太鼓座に所属されて
いた高野功先生に教えて頂きました。
あちこちのイベントにも参加し、楽
しく活動していましたが、そのうち
メンバーも減り、練習も休みがちに

なり、太鼓から離れてしまいました。
でも、太鼓への思いは消えておらず
五年前より山崎文化会館和太鼓教室
に参加し、再びバチを握りました。
現在では、和太鼓音羽というチーム
名も決まり、女性ばかりのエネルギー
シユな仲間とステキな指導者内海一
行先生と共に、練習を重ねています。
一度は離したバチを再び握った和
太鼓の魅力は、なんといつても音で
す。母親の胎音に似ていると言われ
ますが、何か懐しい響きなのです。

また、打てば響いてくれる懐の広さ
と、打てども打てども限りのない奥
の深さに取りつかれてしまします。
リズムが速くなると、正確にきれい
に打てないため、ジレンマにも落ち
入ります。それでも、毎週木曜日が
感と、太鼓の面に向って思い切りバ
チを振り下ろす快感があるからでしょ
う。私にとっては、一番のストレス
解消です。もうしばらく体力が続く
限り、和太鼓から離れたくないです。

心の張り合い

山崎民謡連合会 日本民謡「やまっ子会」 石田陽子

川柳破丸会

清水省三

卒業式 雪もホタルも どこ行つた
谷口 柳幸

父と母との生活が十年程続きましたが、平成二十年三月アツという間に他界してしまいました。仕事・民謡、介護と息をつく間もない程の日々でしたが、いつしか生活のリズムになり主人も協力してくれての十年でした。張合いがなくなると言うのは、精神的にも肉体的にもなかなか元にはもどてくれず、時間にも余裕があるのに、いつまでも夜遅くまで起きたり普通の生活が出来ません。

「今日はサンケイで優秀賞もらつたよ～」トロフィーや盾を見せると「オオ～やつたナア～」と言葉は少しあるものでした。私の留守の間に親戚の人が訪ねて来ると、わざわざ床の間に飾つてあるトロフィーや盾を自慢そうに見せていましたか：今では賞をもらつても、仏壇に見せるだけで：でも声が耳に入つて来ます！「ああ～喜んでくれてる」いつの日か両親の元へ行けた時に沢山話ををしてやり

たいと思います。その日が来るまで人の心に届く様な民謡が唄えるよう頑張って行きたいと思います。心中に両親が生きているから…。

平成二十年は指導者の山田栄三さんが死去された悲しい年となりましたが、会員十三名が月一回集まって従来通りに続ける事になり、お互い遠慮ない意見を出して賑やかな会合になっています。

どなたでもお気軽に御参加下さい。

物忘れ あんたもそらかと 安心し

岸本 新風

長電話 言うべきことを 言い忘れ

是兼 芽吹

後ろ髪 ひかれすぎたか ハゲが出

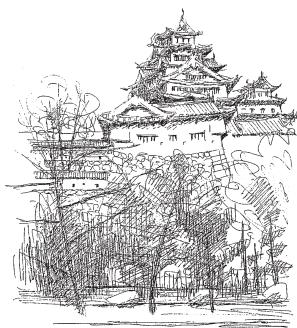
香山 釣遊

老夫婦 リズム合うのが 薬どき

志水 亀の子

酔つてない言いつつ斜めに 歩いて
る 清水 三省

言いにくいことはウワサのせいに
する 谷川 そよ風



宍粟市山崎文化協会

役員及び団体名

会長	藤井 慧乗
副会長	伊野 操治
理事	福岡 久藏
井口 武一	宗平 吉司
井口 武一	栗山 節子
町 深田 竹添 和彦	谷川 耕三
栗山 節子	伊野 悅子
山崎植物同好会	山崎郷土研究会
山崎文学会	山崎歌人協会
新潮会	山崎開碁同好会
山崎茶華道協会	山崎謡曲同好会
山崎邦樂邦舞研究会	山崎邦樂邦舞研究会
山崎児童合唱団	山崎児童合唱団
山崎俳句協会	山崎俳句協会
さつき民踊グループ	山崎美術協会
山崎邦樂邦舞研究会	山崎詩舞道連盟
前野 朝日	西川 秋久
前野 朝日	西川 大部
前野 朝日	石野 行男
前野 朝日	西岡 正勝
前野 朝日	伊達 達也
前野 朝日	石山 澄之
前野 朝日	播州山崎太鼓
前野 朝日	播磨さつき会
前野 朝日	播磨さつき会
前野 朝日	平成会
庄 清水 安井 克典	前野 陽子
庄 清水 安井 克典	前野 陽子
庄 清水 安井 克典	前野 陽子
庄 清水 安井 克典	前野 陽子
庄 清水 安井 克典	前野 陽子
庄 清水 安井 克典	前野 陽子
庄 清水 安井 克典	前野 陽子
事務局長 同次長 事務局長	監事
事務局長 同次長 事務局長	監事
事務局長 同次長 事務局長	監事

会計 西川 佳代

(敬称略・順不同)

「やまさき文化」編集委員

編集長 浅田 耕三
委員 荒木 俊介
町 深田 竹添 和彦
栗山 節子
秋久 光子
北川 泰子
前野 良造

事務局だより

「宍粟市文化協会、当たり年」

本年度は宍粟市文化協会にとって

当たり年でした。

まず、「平成二十年度西播磨地域

ふれあい文化交流会」が九月二十三

日、西播磨文化協会連絡協議会と宍

粟市文化協会の共催で宍粟防災セン

ターにて開催。西播磨各地域より百

二十名を超える多数のご参加をいた

だきました。山崎児童合唱団、オカ

リナグループ「小鳩」の皆さんによ

るアトラクションに始まり、千種鉄

の豪商平瀬露香と平瀬家の所有して

いた源氏物語写本についての浅田耕

三氏の講演、そして午後は山崎郷土

研究会と山崎ウォーキング＆ウォッ

チング実行委員会のご協力により山

崎の古い町並みや古刹などの由来説

明を聞きながら散策、ほとんど公開

されたことのない貴重な美術品の鑑

賞や伝統的産業の見学などもあり、

歴史ある文化が今もしっかりと息づく

「山崎」をご堪能いただきました。

十一月には「兵庫県地域文化を考

えるシンポジウム」が西播磨文化協

会連絡協議会主催で夢前町にて開催

され、宍粟市文化協会からは中原哲

男様（波賀文化協会）がパネリスト

として出席、ちゃんとこ踊りの由

来や伝承についての研究成果をご紹

介いただきました。

一月、恒例の「西播磨新年文化交流

会」（志んぐ莊にて開催）において

は、山崎邦樂邦舞研究会所属の山

崎竹社会・光陽会・琴泉菖蒲会の皆

さんによる長唄と箏曲をご披露いただき、

新春に相応しいアトラクションで会

場を盛上げていただきました。また

当日は三味線製作の目坂進先生（赤

穂市）の「ともしひの賞」受賞お祝

もあり目坂先生作の三味線での演奏

は偶然とはいえ機を得た披露でした。

ご紹介した三つの事業とも、宍粟

はじめ県内の文化活動関係の方々に

アピールするとても良い機会になっ

たことと思います。ご出演ご協力い

ただいた方々、団体に感謝申し上げ

るとともに、このような事業機会を

通してお互いが刺激しあい宍粟及び

西播磨の文化振興に繋がってゆくこ

とを期待いたします。

事務局長 前野 良造

編集後記

「やまさき文化」第二十八号がみ

なさまのご協力により発行の運びと

なりました。

今号は特別寄稿として、山崎町岸田ご出身のNHK大阪放送局長堂本光氏の玉稿を頂きました。

司馬遼太郎の『播磨灘物語』や『街道をゆく』の紹介の中に、氏のなみなみならぬ「ふるさとへの思い」がこめられています。

各部の理事さんの報告文も、少ない制限字数ながらそれぞれの個性、特色、活動の様子が適切に紹介され

好個の情報誌かとまずは自賛。

卷頭の作品を創刊時から書かせていただいていますが、「老木萎^{エウジテ}独愁吟^ス」の底で書くのに四苦八苦しておりひたすら新しい書き手の名乗りを切望しています。

旧山崎藩本多家の五代当主本多忠

可公は名君のきこえ高く、藩政に数々

の業績をのこした方ですが、越前丸

岡藩五万石の有馬家から山崎へ養子

にきた方です。わが市とゆかりのあ

るその丸岡町が「日本一短い手紙」

を九十三年から募集し、今や応募數

が通算百万通を超えているそうです。

そのうち「一筆啓上賞」に輝いたの

が先日、「心をうつみじかい手紙」

としてさる新聞のコラムに掲載され

全国の人々に読まれました。

その壮舉にあやかり宍粟の文化發

展のため「心をうつ文」をどんどん

寄せて頂くようこの誌面を借りてお

願いいたします。

編集長 浅田 耕三



TOKIISHI

飛石機械産業 からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で40数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、一人の人間として使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

◆最新型カラー現像機導入◆

カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店



アニアカメラ *Specialty Camera Shop*

宍粟市山崎町東鹿沢26-3 本店 TEL(0790)62-2089
咲ランド店 TEL(0790)63-0533

あらゆる印刷の企画から製品まで

株式会社 **支林館印刷所**

宍粟市山崎町山崎53
TEL (0790) 62-1147代
FAX (0790) 62-0081

幸

せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟市山崎町山崎181 TEL(0790) 62-0052

デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店

カメウチ電装株式会社

本社・工場 兵庫県宍粟市山崎町今宿 98-15

TEL (0790) 62-1607代

太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福崎店

用途に合わせて
にしん個人ローン
●住宅ローン ●フリーローン
●マイカーローン ●カードローン
●学資ローン

・豊かな老後生活のために
・資産の効率運用に
にしん個人年金保険
●定額年金保険
●変額年金保険



豊かな街づくりをお手伝いする

西兵庫信用金庫

<http://www.shinkin.co.jp/nisisin/>



一献献上 品質本位

まごころを伝えます。

T E L. 0790(62)1010
F A X. 0790(62)6218



確かな品質と味わい。



SANYOHA I
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎 28

環境と家計にやさしい給湯器!

CO₂
削減

光熱費
カット



省エネ大賞受賞・高効率ガス給湯器

ecoジョーズ

お車と住まいの快適、なんなりと

ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)
本社 宍粟市山崎町中井 96

●石油・タイヤ・自動車用品 ●ガス・水道・住設リフォーム
☎0790-62-4321 ☎0790-63-1234

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

本店：播州山崎町さつき通り（電）0790-62-0170
山田店：播州山崎町山田（電）0790-62-0160
福崎店：福崎町西田原 1177（電）0790-22-7555

パソコン・OA機器・事務用品・スチール家具
各種修理・学校設備品・理化学機器

イトーオフィスサービス 株式会社

山崎町中広瀬117-12 夢公園南隣 T E L (0790) 62-0126